

研究ノート・家庭科における「生活文化」の教育価値

福原美江

Notes on the Educational Value of "Culture of Living" in Homemaking Education

Yoshie FUKUHARA

1. 問題の所在

近年、「生活文化」という用語は、家庭科教育の分野でもしばしば用いられるようになった。しかし、「生活文化」(以下、かぎ括弧を省略する。)という用語は、最新の辞書類にも収載されていない⁽¹⁾。生活文化という用語は、民俗学や文化人類学の分野で散見されるが、研究者によって解釈がさまざまである。民俗学では、生活文化とは、「目的からいえば、生存のための文化であり、内容的には衣食住、社会構造、信仰儀礼、技術文化などを中心とした文化であり、形式的には範型文化であり、性格的には伝統的共同文化」⁽²⁾とする見解が代表的な規定であろう。いいかえれば、民俗学では、常民の生命と生活の再生産過程にかかわる衣食住の生活資料や生活手段、生活技術だけではなく、ひろく一定の地域に定着している年中行事、習俗、交際、婚姻・家族などの族制、経済・行政などの社会構造を含めて、生活文化を構成する指標と捉えている。

ところで、1980年前後から、生活文化は家政学の分野でも注目されるようになり、その関心と研究は急速に高まりつつある。たとえば、1978年に生活文化と家事労働のかかわりを問題提起した研究⁽³⁾、1985年に開かれた東北・北海道支部の家政学会⁽⁴⁾や、1987年の第4回日韓家政学セミナーにおける生活文化に関する講演やシンポジウム⁽⁵⁾などで、家政学および家政教育における生活文化論研究の重要性が指摘された⁽⁶⁾。さらに、日本家政学会は、創立40周年記念事業として家政学シリーズ・全25巻を刊行し、そのなかに初めて『生活文化論』⁽⁷⁾を加え、家政学研究の対象として、生活文化研究への関心は高まりつつある。

このように、生活文化はそれぞれの研究分野で追究されているが、その概念・用法については多様であり、一義的にとえることは困難である。

ここでは生活文化について、訓詁学的、学説的に究明するのではなく、家庭科教育の充実に向けて生活文化の教育価値を明らかにすることを目的にしている。そのために、まず、家庭科教育における生活文化のとらえ方や用法の現状などを整理し、教育内容として生活文化を取り上げる意義と範囲、その学習の方法などを含む、いわゆる家庭科教育における生活文化の教育

価値について明らかにしたい。研究方法は、文献資料調査を中心とし、家庭科および社会科の学習指導要領、ならびにその指導書や教科書、家庭科関係図書のなかから主要な図書を選び分析する。

2. 学習指導要領および教科書における用法

まず、学習指導要領および教科書において、生活文化はどのように把握されているか調べることにする。生活文化が教育内容として登場するのは社会科である。中学校および高校の学習指導要領では、表1(35ページ参照)のように記述されている。

それによると、1977年版の中学校社会の歴史分野、および1978年版の高校社会では、現代社会と日本史(1989年版では、日本史A、日本史B)などに用いられている。しかも、生活文化の取り扱いについては、中学・高校ともに「民俗学などの成果を活用する」ほか、1989年の中学校版では「博物館、郷土資料館などの文化財の見学・調査」の活動を取り入れ、1989年の高校版では「時代の特色や、地域社会の有り様」が、具体的に理解できるように扱うことを示唆している。

これらは、内容および学習方法についての留意点であるが、中学・高校社会(1989年版は地理歴史、公民)における生活文化については、次のように指摘することができる。

第1に、生活文化とは、生活の根底にあった衣食住、共同体的な慣行、人びとの信仰や年中行事、冠婚葬祭、生活用具などを指していること、第2に、日本のような伝統的生活文化が、西洋文化の導入・接触・交流によってどのように変容していくかを理解させる文脈で用いられていること、第3には、生活文化の学習方法としては、博物館や郷土資料館などの文化財の見学・調査など、民俗学の成果を活用することなどに特色がみられる。

一方、家庭科の学習指導要領では、小・中・高校ともに生活文化については全く記述がない。ただし、1978年版の『高校学習指導要領解説・家庭編』(文部省、1979年、62ページ)では、専門科目の「家庭経営・住居」において、次のように記述されている⁽⁸⁾。

「ア. 家庭生活と文化

(前略) ここでは家庭のもつ機能のうち、特に文化の継承と創造を取り上げ、家庭を通して受け継がれていく個々の家庭、地域社会、郷土、民族等の生活文化とその保持発展に家庭が果たしている役割を理解させる。」

そこでは、生活文化の継承と創造は、家庭機能のひとつとしてとらえているが、生活文化の意味内容は明示していない。このような理解の仕方は、日本家庭科教育学会の研究成果⁽⁹⁾と類似しており、これを踏襲したものと考えられる。

次に、高校教科書の記述を検討してみよう。調査対象の教科書は、1978年版学習指導要領に基づく最初の家庭科教科書(1982年度版)と1988年度版教科書のうち、「家庭一般」と「家庭経営・住居」であるが、その結果は表2に示したとおりである(36ページ参照)。

表2の右端欄の◎印は、生活文化について記述のある教科書であり、1982年度用は「家庭一般」・6種類のうちの2冊、1883年度用の「家庭経営・住居」では3種類のうちの1冊であった。しかし、1988年度用の「家庭一般」では、12種類のうちの7冊、「家庭経営・住居」では4種類のうちの2冊が記述しており、この数年間に生活文化について記述した教科書が増えたことがわかる。

表1 中学校・高校学習指導要領（社会・地理歴史・公民）における「生活文化」

中学校・社会	高校・社会および地理歴史，公民
<p>1977年版</p> <p>◆歴史的分野</p> <p>2 内容</p> <p>(4)天下統一の歩み</p> <p>ウ 安土・桃山時代の文化</p> <p>安土・桃山時代の文化を，南蛮文化の受容にも触れながら理解させる。また，武将，豪商などの生活文化に着目させる。</p> <p>(6)開国前の日本と世界</p> <p>エ 新しい思想と地方の文化</p> <p>化政文化を扱い，蘭学と国学を中心とする学問・思想の新しい動きと教育・文化の広がり及び地方の生活文化について理解させる。</p> <p>(7)明治維新（前略）</p> <p>また，我が国の独立の確保と国家の発展に尽くした維新当時の人々の努力，生活文化面における西洋化と伝統文化とのかかわりなどに着目させる。</p> <p>3 内容の取扱い</p> <p>(3)（前略）特に内容の(5)，(6)，(7)，及び(8)の取扱いにおいては，地理的分野との関連を図り，かつ民俗学の成果を活用するなどして，郷土の生活文化に触れさせることが望ましい。その際，程度の高い取扱いは避けるようにする必要がある。</p>	<p>1978年版</p> <p>◆現代社会</p> <p>2 内容</p> <p>(2)現代社会と人間の生き方</p> <p>人間生活における文化</p> <p>世界の諸地域の文化と文化交流</p> <p>日本の生活文化と伝統</p> <p>現代の文化</p> <p>◆日本史</p> <p>2 内容</p> <p>(4)幕藩体制下の文化の動向</p> <p>ヨーロッパ文化との接触と鎖国</p> <p>幕藩体制と封建的思想の展開</p> <p>町人文化の発展と農村の生活文化</p> <p>封建社会の動揺と新思想の展開</p> <p>3 内容の取扱い</p> <p>(1)（前略）</p> <p>また，生活文化の取扱いに当たっては，民俗学などの成果を活用して，その具体的な様相を把握させるようにする。</p> <p>(4)（省略）</p> <p>ア 主題の設定に当たっては，例えば，次のような観点が考えられること。</p> <p> c 衣食住，年中行事，冠婚葬祭，生産用具などの生活文化の展開を，社会との関連において学習できるもの</p>
<p>1989年版</p> <p>◆歴史的分野</p> <p>2 内容</p> <p>(4)世界の動きと天下統一</p> <p>イ 織田・豊臣の政治と桃山文化</p> <p>（前略）この時代の文化に対する海外からの影響や武将，豪商などの生活文化に着目させる。</p> <p>(6)世界情勢の変化と幕府政治の行き詰まり</p> <p>イ 新しい学問・思想と地方の生活文化</p> <p>学問・思想の発達とこの時代の文化を扱い，蘭学と国学を中心とする学問・思想の新しい動きと教育・文化の広がりや地方の生活文化について理解させる。</p> <p>3 内容の取扱い</p> <p>(1)内容の取扱いについては，次の事項に配慮するものとする。</p> <p>ウ 日本人の生活や生活に根ざした文化については，各時代の政治や社会の動き及び各地域の地理的条件，身近な地域の歴史とも関連付けて指導するとともに，民俗学などの成果の活用や博物館，郷土資料館などの文化財の見学・調査を通じて，生活文化の展開を具体的に学ぶことができるようにすること。</p>	<p>1989年版</p> <p>[地理歴史]</p> <p>◆日本史A</p> <p>2 内容</p> <p>(2)幕藩体制の形成と推移</p> <p>イ 幕藩体制の確立と都市及び農村の経済や文化</p> <p>幕府及び諸藩の支配体制の特質，都市生活を基盤とする町人文化，農村の生活文化などに着目して，幕藩体制の確立と経済や文化の発展を理解させる。</p> <p>◆日本史B</p> <p>2 内容</p> <p>(4)幕藩体制の推移と文化の動向</p> <p>ウ 産業経済の発展と都市や農村の文化</p> <p>幕藩体制の下での経済機構や交通・技術の発展，都市の繁栄などに着目して，農業や商工業の発展及び町人文化の形成，農山漁村の生活文化を理解させる。</p> <p>3 内容の取扱い</p> <p>(1)（省略）</p> <p>ウ （前略）生活文化については，時代の特色や地域社会の有様などと関連付けるとともに，民俗学などの成果に基づきその具体的な様相を把握させること。</p> <p>(4)（省略）</p>

	<p>ア-(-)衣食住, 年中行事, 冠婚葬祭, 生産用具などの生活文化について, 時代や地域の特性との関連において学習できること。</p> <p>[公民]</p> <p>◆現代社会</p> <p>2 内容</p> <p>(1)現代社会における人間と文化</p> <p>現代世界における文化の多様性・複合性に着目させるとともに日本の生活文化と伝統について理解させ, 異なった文化への理解を深めさせる。</p> <p>イ 日本の生活文化と伝統</p> <p>日本の生活文化と伝統を理解させ, それらが行動の基盤になっていることを考えさせることにより自己理解を深めさせるとともに, 人生における宗教や芸術の意義について考えさせる。</p>
--	---

注記: 1989年版高校学習指導要領では社会は廃止され, 地理歴史と公民に分離した。

表2 高校家庭科教科書における「生活文化」の記述について

1982年度用

番号	書名	判型	検定済年	著作者(代表者)	発行所
001	家庭一般	A 5	1981	松原治郎・伊東清枝ほか11名	東書 ◎
002	家庭一般	A 5	1981	青木茂・矢部章彦・山下俊郎ほか22名	中教
005	新版・家庭一般	A 5	1981	小池五郎・仙波千代・渡辺ミチほか27名	教図
008	高校家庭一般	A 5	1981	片山芳子ほか15名	実教
011	家庭一般	A 5	1981	一番ヶ瀬康子・村田泰彦ほか15名	一橋 ◎
012	家庭一般	A 5	1981	酒井ノブ子・藤枝恵子・寺本芳子ほか32名	学研
023	家庭経営・住居	A 5	1982	青木茂・扇田信ほか9名	中教
027	新版・家庭経営・住居	A 5	1982	青木志郎・仙波千代ほか7名	教図
029	高校・家庭経営・住居	A 5	1982	片山芳子ほか11名	実教 ◎

出典: 文部省『高等学校用教科書目録(1982年度使用)』(1981年4月), 『同(1983年度使用)』(1982年4月)より作成。

1988年度用

番号	書名	判型	検定済年	著作者(代表者)	発行所
068	家庭一般	A 5	1987	清枝ほか14名	東書
069	家庭一般・改訂新版	A 5	1987	香川芳子・林雅子・湯沢雍彦ほか25名	中教
070	新版・家庭一般	A 5	1987	仙波千代・小池五郎ほか24名	教図 ◎
071	新家庭一般	B 5	1987	伊藤央子・小池五郎ほか23名	教図
072	新版・家庭一般	B 5	1987	岩崎芳枝ほか14名	実教 ◎
073	高校家庭一般・三訂版	A 5	1987	片山芳子ほか20名	実教 ◎
040	新家庭一般	B 5	1984	岩崎芳枝ほか19名	実教 ◎
074	最新家庭一般	B 5	1987	樋口哲子・加藤とみえ・大野静枝ほか25名	一橋 ◎
075	新家庭一般	A 5	1987	一番ヶ瀬康子・村田泰彦ほか18名	一橋 ◎
041	家庭一般 改訂版	A 5	1984	一番ヶ瀬康子・村田泰彦ほか15名	一橋 ◎
076	新家庭一般	A 5	1987	酒井ノブ子・内藤道子・寺元芳子ほか57名	学研 ◎
043	改訂 家庭一般	A 5	1984	酒井ノブ子・藤枝恵子・寺元芳子ほか35名	学研 ◎
047	家庭経営・住居 改訂版	A 5	1985	青木茂・扇田信ほか9名	中教
053	改訂版 家庭経営・住居	A 5	1985	青木志郎・仙波千代ほか7名	教図
059	高校家庭経営・住居改訂版	A 5	1986	林周二・菊竹清訓・片山芳子ほか8名	実教 ◎
084	新家庭経営・住居	A 5	1988	酒井ノブ子・花岡利昌ほか23名	学研 ◎

出典: 文部省『高等学校用教科書目録(1988年度使用)』(1987年4月), 『同(1989年度使用)』(1988年4月)より作成。

そこで、1988年度用の教科書に限定して⁽¹⁰⁾、その記述内容を抽出すると、表3(38～39ページ参照)のとおりである。いずれの教科書においても、明確な概念規定をしているわけではないが、生活文化の把握のしかたや、その用法には違いがみられる。

これらの教科書のうち、相対的に生活文化について記述している1988年度用「家庭一般」2冊(表3の教科書番号では、072, 075)と、1989年度用「家庭経営・住居」(教科書番号・059)について考察しておく。

教科書番号・072「新版家庭一般」は、1988年度用として新規に発行された教科書で、「一人の生活者として自立していく力」「男女ともに将来の家庭責任をはたしていく力」を養うことを目標にして編集されている。同書では、生活文化は「現代家庭の課題」のひとつとしてとらえ、「衣食住などの日常生活にかかわる生活文化」は、本来、家庭行事・育児など、家庭生活のあらゆる機会をとおして伝承されるべきであるが、現代では各種の教育機関やマスメディアに代替され、画一化しているという問題点を指摘する文脈で記述されている。

一方、075の「新家庭一般」は、表2の1982年度用の011「家庭一般」の編集方針を基本的には踏襲しているが、本書はとくに、家庭一般では「生活者の目から生活をとらえ、生活者として自立するための考え方や生き方を」学ぶため、男子も選択して履修できる内容で、しかも「生活文化の視点」を重視して編集している。まず、「何を学ぶか」では、「生活自立と共同責任」「生活の原理・科学」「生活文化の継承と創造」の三点を明示し、生活文化の学び方として、「衣・食・住の生活に含まれている原点・原型・原材料などに注目」することを重視している。さらに、生活文化は具体的には家事労働を通して、親から子どもに伝達されていくため、子どもも家事労働への参加を積極的にすすめるように記述している。

教科書番号・059の「高校家庭経営・住居改訂版」は、教科書のなかではもっとも多く、生活文化について記述している。この教科書では、年中行事だけではなく、生活習慣、生活信仰、生活意識、生活の知恵なども生活文化の一部として把握し、これらは日常生活のなかで個人を形成する原動力にもなるととらえている。

このような記述内容を調べてみると、高校家庭科教科書における生活文化のとらえ方は、およそ三つに類型化することができる。

- ① 衣食住など日常生活にかかわるものを生活文化ととらえ、生活文化は家庭行事や育児、家事労働を通して伝承されるという記述……教科書番号・072「新版家庭一般」。
- ② ことば遣いや礼法、作法、日常生活に関する知恵や慣習、祭祀を含めて生活文化ととらえる記述……教科書番号・073「高校家庭一般・三訂版」。
- ③ 生活文化は先人が生活をいとおしむ中から生み出された価値であり、その社会の生活文化は、具体的には家事労働を通して親から子どもへと伝承されていくという記述……教科書番号・075「新家庭一般」、および041「家庭一般改訂版」。

このようにみえてくると、高校家庭科教科書の記述によれば、生活文化の教育価値については、次のように考えられていることがわかる。

第1は、①や②のように、衣食住の日常生活、ことば遣い・作法・生活習慣などを含めて生活文化ととらえ、それらを伝承するところに教育価値を見いだすという考え方である。

第2は、③のように、単に日常生活の衣食住の生活様式の伝承に重点をおくのではなく、衣食住の生活に含まれている原点・原型・原材料などを引き出し、それを継承し、かつ新しい生活文化を創りあげていくことに教育価値を見いだすという考え方である。

表3 高校家庭科教科書における「生活文化」の記述（1988年度用）

番号	ページ	記述内容
070	6 7	<p>・「家庭一般」を学習する前に …（前略）私たちは、どのように今までの文化を継承し、また、新しい生活文化を創造してきたのだろうか。（中略）</p> <p>これから学習する「家庭一般」では、私たちはの生活の現状を通して、生活技術や生活文化をとらえ、やがて自立して社会の一員となり、新しい生活を創造するために対応することのできる基礎的・基本的な知識や技術を学習することを目的としている。</p>
072	12 19	<p>・現代家庭の課題 - 4. 生活文化の伝承とその問題 …（前略）人間が歴史的につくりあげた生活様式の全体を文化という。文化のなかでも衣食住など日常生活にかかわる生活文化は、家庭行事・育児など、家庭生活のあらゆる機会をとおして伝承される。</p> <p>ところが現代は、家庭間をつなぐ地域としてのまとまりが弱まり、各家庭あるいは各個人が独立して生活することが多くなっている。また、核家族化に伴って世代間の交流が少なくなるなど、伝統的な文化の伝承は円滑に行われなくなっている。それにかわってマスメディアや各種の教育機関が、私たちに生活文化を伝えるという傾向が強くなり、伝統や地域文化の画一化が押し進められている。</p> <p>・図16 家事労働がもたらすもの 家族・個人のための家事労働 - 生活文化の伝承</p>
073	9	<p>・家族形態の特徴 …（前略）ことば遣いや礼法、衣食住など日常生活に関する知識や習慣などの生活文化が、じゅうぶん継承されにくいということも指摘される。</p>
040	7 13 11	<p>・家庭と社会 …（前略）また、家庭は、生活に根ざした文化を伝承し、社会の影響を受けながら、新しい文化をつくりだしている。</p> <p>・現代家庭の課題 - 4. 文化の伝承とその問題 …（前略）生活文化は、日常生活のなかで伝承されるので、子どもたちを幼いうちから家庭生活のさまざまな活動に参加させることがたいせつである。</p> <p>・表1-4 家族関係とその役割 老人との関係 - 老人は生活文化の伝承者である。</p>
074	序章	<p>・明るい家庭の創造をめざして 過去から現在へ、そして、未来へと続く私たちの生活。その流れのなかで、私たちは、先輩の残してくれた文化を継承して、新しい生活文化を創造し、やがてつぎの世代にそれを伝承していく。（中略） 私たちは、明るい未来の生活文化の創造に向けて、今日一日をよりよく生きるよう努めることがたいせつである。</p>
075	3 4 6 9	<p>・はじめに 生活文化の視点を大切にしたこと。- 私たちは、生活をいつくしむ考えに立ち、文化の視点から生活をとらえようとしたこと。とくに、食生活、衣生活、住生活などでは生活文化の視点を大切にしたこと。</p> <p>3 ・なにを学ぶか - 3. 生活文化の継承と創造 生活文化は、先人が生活をいつくしむなかから生みだした価値であり、日常生活のさまざまな場面に、それをみいだすことができる。 現実の生活は、生活文化に学び、それを受けつぐことによって営まれている。私たちは、さらに一歩すすめて新しい生活文化を創造できるような学習をめざしたい。</p> <p>4 ・どのように学ぶか - 4. 生活文化への関心 学習にあたって、それぞれの地域と民族に独自の生活文化や生活の歴史に注目するならば、広い視野から興味深く学ぶことができる。</p> <p>6 ・どのように学ぶか - 6. 具体例 D. 受けつがれてきた生活文化や、外国の生活様式などを調べてみる。 E. 生活文化のあり方について考えてみる。- 米食と食生活の現状、および将来の方向などの考察。</p> <p>9 ・1-1 家庭の機能 - 家庭生活文化の伝承と創造</p>

	32	<ul style="list-style-type: none"> ・生活文化としての家事労働 …（前略）その社会の生活文化は、具体的には家事労働を通して、親から子どもへと伝達されていくものが多い。（中略） 子どもを積極的に家事労働に参加させることもまた、家庭の責任であるが、私たちひとりひとりが努力することによって、家庭の生活文化を継承し、新しい生活文化をつくる主体としての基礎能力を育てるようにしたい。
	041	<ul style="list-style-type: none"> ・はじめに 家庭生活と、地域や社会全体との関わりを重視し、進んで私たちの暮らしている地域に教材を求め、その地域に学び、そこに新しい生活文化を創造できるように配慮した。 ・何を学ぶか …（前略）家庭一般が、人間の基本的な営みに関わる学習であるかぎり、その内容は、私たちの日常生活の基礎になる衣・食・住、家族関係、保育、介護などの生活事象になる。そして、そこにふくまれている文化が生み出した価値で構成されることはいうまでもない。それは、生活文化と表現してもよいが、たんにそれを継承するだけでなく、進んで新しい生活文化を創造できるように学習したいものである。 ・どのように学ぶか D. 伝承されてきた生活文化や、外国の生活様式を調べてみる。 E. 生活文化のあり方について考えてみる。－ 米食と食生活文化の現状、および将来の方向などの考察。
	059	<ul style="list-style-type: none"> 15 ・文化、その継承と創造 …（前略）年中行事だけではない。狭い住居の一隅にも一輪の花を飾って自然を生活に取り入れる習慣、祈願をこめて千羽鶴を折る習慣などは、わが民族のおくゆかしい生活文化の一部である。 16 ・文化の担い手、創造者としての家庭 …（前略）年中行事や衣食住の知恵などの例でもわかるように、各家庭では日常生活のなかで、あらゆる機会に生活文化が反復学習、実践され、それが家族を形成する個人へも浸透していく。 16 ・継承の断絶化 生活文化をはじめ固有諸文化の世代間継承は、昔の停滞した閉鎖的な社会では、よくもあしくもそれほどの変化はなく行われていたが、…（後略）。 18 ・継承の回復 しかし生活文化だけを考えてみても、環境の保全が重視される時代、資源やエネルギーの節約時代を迎え、物をたいせつに生かして使うくふうや、身近な資源をじょうずに利用する知恵が改めて必要になった。 78 ・家事労働の意義 …（前略）家事労働が適切に行われることによって、家族は心の安定を得て生活でき、各人の個性が発揮されるとともに、各家庭の生活文化がつくられていく。（中略） 79 したがって、各家庭で明確な目標をもち、計画的、能率的に家事労働を行うことによって、個性豊かな各家庭の生活文化をつくり上げ、これを次の世代に継承する必要がある。
	084	<ul style="list-style-type: none"> 7 ・家庭生活の変化と未来 …（前略）特に昭和35年ころから高度経済成長に伴って家庭生活は物質的に豊かになってきた。しかしその反面、家族員同士の結びつきが薄れがちになるなど、精神的には豊かになったとはいえない面もある。従って私たちは、伝統的な生活文化のよさも見直すように努力したいものである。 182 ・表1 家庭経営の内容 ⑧生活文化を次の世代へ伝承し、また創造する。

注記 (1)・は、見出し（小見出しを含む）を表す。

(2)左端欄の番号は、前掲表2の教科書番号と同じ。教科書番号059と084は、「家庭経営・住居」で、そのほかは「家庭一般」。

両者においては、生活文化のとらえ方は異質であり、基本的には、前者は現在の日常生活と生活習慣に適応するという現実への適応性と実用性に価値をおく生活観であり、後者は、現在の生活への適応ではなく、むしろ現在の生活では体験しがたい生活の原理や原点・原型をとらえ、それを再現する学習に価値をおく生活観である。いずれの考え方も、前述した社会科における生活文化—伝統的な生活のしかた・様式が、外来文化の受容過程でどのように変容するか—とは異なり、家庭科独自の生活文化の教育価値を示している。筆者は、第2の考え方に立つが、すでに別の機会に述べているので⁽¹¹⁾、ここでは触れないことにする。

3. 家庭科教育関係の文献・資料における用法

次に、家庭科教育と生活文化との関連に注目した研究には、以下のものがある。ここでは、二つの用法について紹介しておく。

第1は、村田泰彦のとらえかたである。それによると、1981年、家庭科教育の内容を構想するにあたって、(1)家事労働についての最低必要な知識と技能、(2)衣食住を中心とする生活についての科学的認識、(3)衣食住を中心とする生活文化の創造、の3点を考慮すべきことを示し⁽¹²⁾、翌年には高校家庭一般の指導書において、生活文化とは「人間が生活をつくりだす過程と、結果としての生活様式とその内容を含む」⁽¹³⁾と規定した。さらにそののち、家庭科の対象は、具体的な生活事象であり、生活文化であると述べ、この生活文化は、(1)生活をいつくしみ、かつ生活を耕す過程で発見された文化価値であること、(2)生活文化を創りだす過程では生活を耕やすことにもなう労苦が支払われていると考え、家庭科では、一人ひとりが生活文化の継承と創造を担うという生活観をそだてることに重点をおいている。そのためには、(1)生活事象の原点・原型や原材料を対象にする必要があること、(2)生活の原体験をもたせるような教育内容を編成することが、生活文化の学習にとっては不可欠であると述べている⁽¹⁴⁾。

家庭科の教育内容の再編成にあたって、氏がこのように生活文化の教育価値に注目した根拠は、(1)生活文化は、人類が生活をつくる過程、生活を耕す過程でうみだされた文化の所産であり、人類の生活の知的遺産が豊かに含まれているので、それを継承し新しい生活文化を創造する必要があること。その手立てとしては、(2)「生活の根」になるもの、すなわち生活の原点や生活必需品の原型・原材料がとらえられる教材に着目し、(3)直接的な体験を通して学習させることなど、その教材化の視点と学習の方法に言及しているところに特色がある⁽¹⁵⁾。

具体例を挙げてみよう。手打ちうどんを作る学習では、市販の小麦粉を利用して作るのではなく、むしろ小麦そのものを石臼で碾く過程を組み入れ、①小麦粉の原材料である小麦の形(原型)に目を向ける、②石臼の重さや構造、粉碎の物理的性質などを考える、③石臼の回転速度やその労力などを体験する、などの学習を先行させる⁽¹⁶⁾。このような学習によって「生活文化の原点」(この場合は、小麦粉の原材料、うどん作りの原点、生活用具の原型など)を疑似的ではあるが、体験的にとらえることに教育価値があるという考え方である。

第2には、清野きみの考え方である。清野は、1981年に生活資料、生活手段、生活主体の相互関係を生活様式といい、それが生活文化の総体であると指摘した⁽¹⁷⁾。その後、1986年には、東北生活文化学会および東北・北海道支部家政学会でのシンポジウムをふまえ、生活文化を取り込んだ家政教育の必要性を強調した⁽¹⁸⁾。さらに、1987年と1988年にも、家庭科教育学の構築に向けて、生活文化の教育価値の確認が重要課題であることを指摘している⁽¹⁹⁾。

それによると、清野は、生活文化を「人間の基礎的生活拠点に係わる生活様式に包摂される内容をもっているもの」と規定し、この生活文化は、抽象的には人と物の相互作用の継続の文化であり、過程の文化であること、具体的には、日常の生活過程としての家庭生活で、家族メンバーによって反覆的、経常的に営まれることによって伝達される技術や価値を含み、家族メンバーによって消去されたり、新しく再生される、ととらえている。しかし、このような生活文化は、生活の孤立化、基礎的生活拠点の基盤劣化によって崩壊に通じる恐れがあるため、家庭科教育の目標は、「生活文化を総合的に批判する能力の形成にある」と結論づけている⁽²⁰⁾。いいかえれば、家庭科教育は、(1)日常の生活過程の拠点としての家庭生活、(2)生活主体としての家族メンバー、(3)生活の反覆および実践過程における技術や価値の獲得、(4)その伝達と再生を通して、(5)生活文化の総合批判能力を形成するところに、その独自性があると考えられている。

以上、生活文化と家庭科教育に関心をよせている二つの考え方を紹介したが⁽²¹⁾、両者の家庭科教育、および生活文化のとらえ方とその教育価値の考え方は異なっている。その相違点の第1は、家庭科教育論である。清野は、生活文化の総合批判能力の形成をその目標においているが、村田は、生活文化の原点・原型・原材料に注目させて、継承と創造を考えていること。第2には、清野は、とりわけ生活拠点として家庭生活(場)と、家族の一員という限定された集団を重視しているが、村田は、「家族」の「家庭生活」という限定的なとらえかたではなく、個人としての生活者が、自立的な生活を確立できることを重視していること、などである。

4. 「生活文化」の教育価値

家庭科教育における生活文化のとらえ方、およびその教育価値については、以上のとおりである。そこで、家庭科の教育内容を構想するために、生活文化の教育価値について、以下のよう引き出してみた。

第1は、生活文化の批判的継承と、新しい生活文化を創造していく「生活者として生きる」という視点である。これは、生活の価値的側面、つまり生活を尊重する思想や生活観を育てる役割をもつといいかえることもできる。生活文化の「文化」が耕作を意味することに由来すると考えるならば、家庭科教育が「生活」を対象とするがぎりは重要な視点である。

とくに、本稿では、「生活者」⁽²²⁾という用語を使用しているが、その根拠は、ひとつには、小・中・高校家庭科では、男女にかかわらず、ひとりの生活者として必要な知識と技術を身につけることをねらいとしているからである。そのためには、学習者一人ひとりが、いまを生きる生活者として、自覚的に生きることができるよう内容を編成する必要があること。ふたつには、従来、家庭科および社会科では「消費者」という用語が使われている。しかし、学習者の「生活」を考えた場合、生産者の側に立つ可能性も消費者の側に立つ可能性ももっている。いずれの場合でも、消費の主体という一面的な「消費者」ではなく、生活文化創造の主体として、まず、日々の自分の生活を自立的にコントロールできる知識と技術を必要とする。したがって、受け身になりがちな消費者を使用しないで、生産と消費を統一的に把握できる「生活者」を使用することが適していると考えている。

第2の視点は、生活と生命を再生産するための生活資料や生活手段の学習が不可欠であり、そのための科学的知識と技能の系列からおさえたいということである。そのばあい、すべての

生活資料や生活手段の知識や技能を習得することは不可能であって、できるだけ生活資料や生活手段の原点や原型、原材料などが理解できるような配慮が必要である。これは、既存の生活文化形成の原点や原型、原材料などに注目することによって、生活文化を原初的に、あるいは基本的に獲得・認識できるようにしたいからである。

第3には、現在の定着化し様式化した生活文化を、時間と空間の系列からとらえるという視点である。これは、定着化し様式化した生活文化の発展過程に着目し、生活文化を時間軸と空間軸からとらえ、生活文化を歴史的（伝承・承過過程）に、地理的（伝播過程）に学習する内容である。既存の生活文化を単に受容し、継承するだけでなく、これからの新しい生活を創造していくためには不可欠な視点である。

本稿では、以上のように生活文化の教育価値を再認識することとし、家庭科教育内容を構想する試みは、稿をあらためることにしたい。

注

- (1) たとえば、1988年に発行された『大辞林』（松村明編、三省堂）では、「生活様式」「生活力」は掲載しているが、「生活文化」については叙述していない。また、『文化人類学辞典』（石川栄吉、梅棹忠夫ほか、弘文堂、1987年）でも、項目にはない。ただし、「住居」の項目中の説明文にはある。
- (2) 岡政雄「日本民族学への二、三の提案」（『日本民族学体系・第2巻、279ページ、1958年、平凡社）。しかし、最近では、「伝統的共同体の文化」が崩壊しているという考えで、このような規定に異議がだされている。たとえば、生活文化とは「それぞれの地域で、人々が経済生活を送っていくうえでの多様な慣行労働様式、年中行事などを一定に定式化した概念」と規定し、生活文化の発生、展開、融合、変容などを明らかにするためには、「生産・労働の視点」が不可欠と指摘する人もいる（進藤賢一「生活文化の地域差」、北海道みんぞく研究会編『北海道をさぐる』12号、82～83ページ、1986年）。
- (3) たとえば天野寛子は、「生活文化」（宮崎礼子・伊藤セツ編『家庭管理論』155ページ、有斐閣、1978年。なお、1989年には、同編『家庭管理論・新版』を發行）、「生活文化の伝承と家事労働」（大森和子ほか『家事労働』181ページ、光生館、1981年）、「家事労働・家事様式と生活技術・生活文化」（日本家政学会編『家庭生活の経営と管理』67ページ、朝倉書店、1989年）、などの論稿で生活文化について言及している。天野は、生活文化とは「現在の生活状況を所与のものとしながらも地球的視野に立った物の配分を考慮したうえで、営まれる生活の様式（生活手段とサービス、生活時間の配分、労働、男女の役割など）を追求していくこと、それを定着する過程で生活者としての主体性を育てていく方法を含むもの」ととらえ、直接的には家庭科教育内容については触れていないが、教育内容編成についての示唆を含んでいる。
- (4) 日本家政学会東北・北海道支部『創立30周年記念資料集』1985年12月。
- (5) 国際交流委員会「第4回日韓家政学セミナー報告」、『日本家政学会誌』第38巻10号（1987年）、および第39巻5号（1988年）など。
- (6) 東北・北海道支部および第4回日韓家政学セミナーのシンポジウムで、家政教育の立場から報告した清野さみの提案については、本稿の研究目的と関連するので後述することにする。
- (7) 日本家政学会編『生活文化論』朝倉書店、1991年。

本書では、たとえば、「生活文化とは社会的に共有されている生活の仕方の体系」であり、その研究方法には、比較の方法、問題解決の方法、歴史の方法の三つは不可欠（吉野正治、2～7ページ）と指摘している。また、生活文化は、意識内にあるもの、行動に現れたもの、外界の物体に現れたものの三つに分類でき、しかもこれらの三つが三位一体となって一つの文化を構成している。

このような生活文化の特性として、①人間が集団として保有しているもの、②伝統的、保存性が強いこと、③伝達性があること—時間的伝達（世代間伝達＝生活文化の伝承）と空間的伝達（集団的伝達＝生活文化の伝播）、④たくましく、うまく、よく、生きてゆく諸段階の全部が含まれていること、などをあげている（富田守、11～13ページ）。

そのほかには、講座・生活学（全8巻、光生館）のなかに『生活文化論』の刊行が予定されている。

- (8) ちなみに、1989年版学習指導要領、および『高校学習指導要領解説・家庭編』（文部省、1989年12月）では、「生活文化」という用語は全く使われていないが、以下のような科目には、関連する項目と解説がある。

・家庭一般

- ①「現代の家庭の機能を歴史的に、文化的、社会的変化との関連から理解させる。」(25ページ)
 ②「(前略)また、住居の機能は、家族形態やライフスタイル、気候風土や地域文化によっても異なることを理解させる。」(33ページ)

・生活技術

- ①前述の家庭一般①と同じ(40ページ)

・生活一般

- ①前述の家庭一般①と同じ(55ページ)
 ②前述の家庭一般②と同じ(62ページ)
 ③「日本の食生活の変遷と食文化について、食糧事情、地域、各時代の文化的背景、諸外国とのかわりなどとも関連させて理解させる。(以下省略)」(63ページ)

・家庭経営

- ①「(前略)特に、精神の安定、教育、文化の伝承など家庭の普遍的な機能について認識させる。」(106ページ)

そのほか、専門科目の「課題研究」には服飾史、食文化と郷土料理などが、「被服」には被服の起源や被服と文化などが、「食物」には食生活の変遷と食文化などが、「住居」には住生活と住居の変遷などが示されている。1978年版学習指導要領に比べて、新科目の「生活一般」の内容に、「食文化と食事」を編成したことが、大きな特色である。

- (9) 日本家庭科教育学会編「家庭科教育の構想研究」13～14ページ、1977年。この部分の執筆者は亀高京子。

- (10) 本稿で、調査対象の教科書として1988年度版を選んだ理由は、旧教科書検定制度では、3年毎に改訂されており、1988年度版は、ほとんどの教科書で新版を発行をしているからである。また、1991年度版を選ばなかった理由は、すでに1989年に改訂学習指導要領が告示されており、改訂学習指導要領の記述などに影響をうけていることも考えられるからである。

なお、参考資料として、1978年版学習指導要領に準拠した高校家庭一般の教科書発行状況を掲げておく(45ページ参照)。

- (11) 福原美江「教材研究の基礎理論」(村田泰彦・一番ヶ瀬康子・田結庄順子・福原美江共著『共学家庭科の理論』67～68ページ、光生館、1986年)。「衣生活領域の目指すもの」(村田泰彦編『新しいくらしをつくる家庭科の授業』132～140ページ、ぎょうせい、1989年)。

- (12) 村田泰彦「家庭科における学力」(村田泰彦編『教科教育法・小学校・家庭』12ページ、日本標準、1981年)。

- (13) 「家庭一般構想の視点」「家庭科を学ぶにあたって」(『教師用指導書・家庭一般』11および62ページ、一橋出版、1982年)。このほか、「あたらしい家庭科とは—どう構想するか」(『新しい家庭科W E』1982年7月号)でも指摘している。

- (14) 「家庭科構想の視点」(前掲『共学家庭科の理論』)41ページ。

- (15) そのほか、生活文化に言及している論稿には、「生活文化への関心を育てる」(『児童心理』38巻

8号, 金子書房, 1984年7月号), 「『生活科』再編成論」(日本生活学会編『私たちは「生活」をどうとらえて次の世代に伝えたいか』群羊社, 1988年), 「教科の基底」(前掲『新しいくらしをつくる家庭科の授業』ぎょうせい, 1989年)などがある。なお, これらの論稿は, 村田泰彦著『自立と生活文化の教育』(労働教育センター, 1992年)に転載されている。

(16) 前掲『『生活科』再編成論』。

(17) 「家庭科の目標」(清野きみ・豊村洋子編『家庭科教育』学術図書, 1981年) 1ページ。なお, 本書は, 1985年に改訂されたが, 基本的な考え方は同じである。

(18) 「生活文化と家政学—家政教育の立場から」(北海道みんぞく研究会『北海道を探る』12号, 1986年)。なお, 清野きみのいう「家政教育」とは, 学校教育における家庭科教育だけではなく, 社会教育, 家庭教育, 各種の生活講座や教養講座での教育(学習)をふくめて考えられている。このような家政教育は, 「家政学を基盤に, 人間の物質生活, すなわち衣食住の各生活を営む能力の形成に目標をおく」。いいかえれば, これは「生活文化総合批判能力形成にあたり, そこには, 生活主体—生活資料—生活手段—生活文化の循環が含まれ, 生活文化の実践性がある」(207ページ)と指摘する。したがって, 家庭科教育の内容編成の視点として, 生活主体, 生活資料, 生活手段, 生活行為・文化の4点を設定し, 家庭生活, 保育, 食生活, 住生活, 衣生活の領域ごとに内容試案を構想している(203~206ページ)。

(19) 「小・中・高校家庭科カリキュラム試案(中間)を通してみる家庭科教育学の構想」(日本教育大学協会第二常置委員会編『教科教育学研究』第5集, 145~170ページ, 第一法規, 1987年)や, 「家政学教育と生活主体形成」(日本家政学会編『生活設計論』153~162ページ, 朝倉書店, 1988年)などがある。これらの論稿でも, 基本的には前掲(18)と同様な考え方を述べている。

なお, 『埼玉大学紀要(教育学部)教育科学(Ⅲ)』(第42巻第1号, 1993年)は, 清野きみ教授退官記念号として刊行されている。清野自身による40余年の教育と研究の足跡について, 「生活教育からみる家政学論」が載せられている。

(20) 前掲(18), 197ページ。

(21) そのほかには, 学校文化に民衆の生活文化を復権させていく重要性から, 家庭科を民衆の生活文化の視点から見なおし, 「生活のなかに歴史を発見し, 歴史を子どもの身近なものに変え」ていくことを提言する小沢有作の考え方がある。小沢のこのような考え方の背景には, 文字文化中心の学校教育とカリキュラムへの批判, 産業社会・都市社会における消費者向けの知識と技術に限定している家庭科の学習指導要領への批判が含まれている。小沢は, 「学校文化のなかで, ただ家庭科のみが, かろうじて民衆の生活文化に直接かかわっている教科」であり, 家庭科を地域文化を中心にした民衆の物質文化の継承と再創造に正面から取りくむ教科としてとらえる重要性を指摘している。小沢有作「家庭科の新しい役割—民衆の生活文化復権の場として—1・2・3」(『新しい家庭科・WE』1985年4, 5, 6月号)。

(22) 日本家政学会編集の『和英・英和家政学用語集』(朝倉書店, 1987年)によると, 「生活者(生産者プラス消費者)」の英語表記として, prosumerを用いている(250ページ)。ただし, 日本家庭科教育学会編『家庭科教育事典』(実教出版, 1992年)には, 巻末資料として「用語の英訳」があるが, 「生活者」については掲載していない。

なお, アルビン・トフラーは, その著書『第三の波』(初版は1980年, 日本放送出版協会)のなかで, 「生産=消費者の出現」(第20章)を設け, このタイトルにプロシューマーのルビを付している。

(1994年4月28日 受理)

参考資料 高校・家庭一般教科書の発行状況（1982年度用から1994年度用まで）

[注記：各欄は、教科書番号、代表著者名、書名、判型、総ページ数の順。]

発行所	1982年度より	1985年度より	1988年度より	1991年度より	1994年度より
東書 2	001 松原治郎, 伊東清枝 家庭一般 A5 p.276	036 松原治郎, 伊東清枝 改訂家庭一般 A5 p.300	068 伊東清枝 家庭一般 A5 p.308	092 伊東清枝 改訂 家庭一般 A5 p.308	501 阿部明子 家庭一般 B5 p.224
中教 5	002 青木茂, 矢部章彦 山下俊郎 家庭一般 A5 p.278	037 青木茂, 矢部章彦 山下俊郎 家庭一般 改訂版 A5 p.288	069 香川芳子, 林雅子 湯沢雍彦 家庭一般 改訂新版 A5 p.292	093 香川芳子, 林雅子 湯沢雍彦 家庭一般 最新版 A5 p.292	503 香川芳子, 本多洋 湯沢雍彦 新家庭一般 B5 p.224
教図 6	005 小池五郎, 仙波千代 渡辺ミチ 新版 家庭一般 A5 p.294	038 小池五郎, 仙波千代 渡辺ミチ 改訂版 家庭一般 A5 p.294	070 仙波千代, 小池五郎 新版 家庭一般 A5 p.286	095 仙波千代, 小池五郎 新版 家庭一般 A5 p.286	505 伊藤央子, 高部和子 家庭一般 B5 p.220
			071 伊藤央子, 小池五郎 新家庭一般 B5 p.204	094 伊藤央子, 小池五郎 最新 家庭一般 B5 p.212	
実教 7	008 片山芳子 高校家庭一般 A5 p.300	039 片山芳子 高校家庭一般 改訂版 A5 p.300	073 片山芳子 高校家庭一般三訂版 A5 p.286	097 片山芳子 高校家庭一般四訂版 A5 p.286	509 片山芳子 図説高校家庭一般 B5 p.216
		040 岩崎芳枝 新家庭一般 B5 p.198		098 岩崎芳枝 新家庭一般 改訂版 B5 p.198	
			072 岩崎芳枝 新版 家庭一般 B5 p.196	096 岩崎芳枝 新版家庭一般改訂版 B5 p.196	508 伊藤セツ 家庭一般 B5 p.216
一橋 112	011 一番ヶ瀬康子, 村田泰彦 家庭一般 A5 p.260	041 一番ヶ瀬康子, 村田泰彦 家庭一般改訂版 A5 p.274	075 一番ヶ瀬康子, 村田泰彦 新家庭一般 A5 p.300	099 一番ヶ瀬康子, 村田泰彦 家庭一般 B5 p.246	517 一番ヶ瀬康子, 村田泰彦 家庭一般 B5 p.220
		042 樋口哲子, 加藤とみえ 大野静枝 明解 家庭一般 B5 p.186	074 樋口哲子, 加藤とみえ 大野静枝 最新 家庭一般 B5 p.218	100 樋口恵子, 有地亨 高等学校家庭一般 B5 p.224	518 樋口恵子 新家庭一般 B5 p.224
学研 197	012 酒井ノブ子, 藤枝恵子 寺元芳子 家庭一般 A5 p.286	043 酒井ノブ子, 藤枝恵子 寺元芳子 改訂 家庭一般 A5 p.302	076 酒井ノブ子, 内藤道子 寺元芳子 新家庭一般 A5 p.334	101 酒井ノブ子, 内藤道子 寺元芳子 新家庭一般 改訂版 A5 p.334	

出典：文部省「高等学校用教科書目録」各年度版より作成。なお、右端欄には、参考のため1989年版学習指導要領に基づく新教科書の発行状況を掲載した。